

「キリストからの祝福」⑥平和と迫害

マタイ 5:9~12

主イエスが山上において教えられたこと、所謂山上の垂訓の最初の部分である祝福のことばを学んでいます。今日は祝福のことばの最後の部分、平和と迫害について考えたいと思います。

1. 「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」9節

「平和」ということばはいつの時代でもどこの国であろうと人間が求め、最もあこがれに満ちた美しい言葉です。「平和」ということばには二つの言葉から出来たとされています。一つは平和とは「一致する。協力する」という言葉から、もう一つは「語る、話しかける」という言葉からです。どちらにしても互いに一致協力できる状態であったり、人が争わないで話し合いが出来る状態、いずれも平和な状態とは何かということを表しています。人と人とが争わないで、話し合え、意見が一致してゆくというのは人間関係の理想的関係ですから「平和」な人が幸いであるというのは説明する必要がないことでしょう。

ですから幸いな平和な人であるためには自分自身が平和を破ったり乱したりしない、また争いを引き起こさないという消極的ながらもバランスを取るのが難しい状況を保つことが必要になってきます。また自分がいくらバランスを取っても相手が崩れるということもありますから丁度小舟の上にお互い立って握手した状態を続けるようなもので不安定さを常にかかえているようなものです。人間の力で平和を保とうとすることは非常に神経を使うことでありおよそ不可能なことに思えます。さらに主イエスがここでおっしゃっているのはもっと高い生き方です。「平和をつくる者は」とあるように平和を積極的に作り出す努力をしなければならぬと教えられています。問題がおきないためには何もしないことが一番だとか、相手をさばき、真実に正しいことが語られてもそこからは平和を作ることはできません。

ではどのようにすれば神の平和が生まれるのでしょうか？ 平和は神によってもたらされます。イザヤ9:6に「主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」とあるようにキリストこそ、「平和の君」です。君とは王としての存在であり、「主権はその肩にあり」と言われるように平和をもたらし権威もお持ちだということです。また毎週歌う頌栄にクリスマスの夜、天の軍勢が告げたことば「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心になう人々にあるように。」ルカ 2:14 とあるように平和は御心になう人にもたらされるということです。主イエスは罪びとにすぎない私たちの救い主として、神とわたしたちとの間を調停し、私たち自身を神との平和な状態へと導いてくださいました。つまり神との平和を得たクリスチャンこそ、人と人との間で平和を作り出す者だと言われるのです。人の争いの根源は罪にあり、神に背を向けて生きる道、すなわち神との敵対関係からすべての不和と悲惨が出ていることを知っているクリスチャンこそ、神の愛だけが癒しと回復の道であることを知っています。つまりクリスチャンが平和を生み出せるということではなくて、まことの平和をもたらし力を持っておられるお方を知っているということです。クリスチャンだけが、平和を作り出す見通しがもてるのです。

今は見かけることが無くなりましたが私が幼児童の頃は冬の特にお正月の遊びはタコ上げかコマ回しでした。大体、近くの田んぼか小学校の校庭であげていました。時々、他のいくつかのタコが近づいてくると適度な距離を持ち続けることが出来なくなって他のタコとぶつかったり、糸がからんでどうすることも出来ずに一緒に地面に落下したりしました。そしてまた地面から一本一本まっすぐにタコを上げなおすことになりました。これは私たちの人と人との関係にも言えることで人と人との横の関係を整えることに苦心し努力している人から見ると人間関係もまず神様との関係をしっかりとってからというのは非常に回りくどいものとして見えるかもしれません。しかし教会や私たち一人一人の信仰生活を送る中で平和とは神様との関係がしっかりとしていることが基本です。また人間関係がこじれた時も神様との関係に戻る事が出来るのです。平和をつくる者でありたいと願わされます。

2. 「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」 10 節

初代教会の時代は、じつに迫害の時代でした。教会は最初はユダヤ人から迫害を受け、のちに、ローマ帝国から迫害を受けました。エルサレムではじまった教会は、時を経ずして迫害によって散らされ、小さくなってしまいました。使徒パウロは、ローマ帝国の各地をめぐって宣教しましたが、迫害を受けなかった場所はどこもありませんでした。迫害は弟子たちにとって想定外の出来事ではなく、イエスはご自分に従おうとする者に、迫害を受けることを覚悟するようと言われていました。また使徒たちも、弟子たちに「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ」使徒 14:22 と教えました。ご存じのように日本でもキリシタンの時代、迫害が起こりました。日本に最初に伝道したのはイエズス会のフランシスコ・ザビエルで、1549年8月15日に薩摩（鹿児島）に上陸しました。ザビエルの日本での伝道はわずか2年でしたがその後、宣教師が次々と日本に来て、ザビエル来日から50年後には日本には60万人のキリシタンがいたとされています。当時の日本の全人口が1200万人ほどと言われていますから人口の5パーセントとなり現在の人口比でいくと今なら600万人ほどのキリシタンがいることになります。しかしその後、迫害弾圧があり、4万人の殉教者が出たということです。

現代はこのように生きるか死ぬかを問われるような迫害はありません。しかし、主イエスに従おうとする限り、やはり何らかの迫害や試練に会うのは必然のことであることを確認しておきたいと思います。聖書の示す私たちが受ける迫害にも大きく二つの種類があります。まずゆえなく迫害を受けることがあります。「義のために迫害されている者」ということです。クリスチャンが曲がった時代を真っ直ぐに生きようとするれば、どこかでぶつかることがあります。信仰とはあまり関係のないことでも、正しいことを言ったりすると、嫌がられたりすることもあります。いわれのないことで、不正な取り扱いを受けたり、心ない言葉をあびせかけられたりすることもあるでしょう。そんなときも、受けた不正や侮辱に腹を立てて終わることなく、主イエスの「義のために迫害されている者は、幸いです」との言葉を噛みしめたいと思います。また同時に自分の未熟さや非常識さが主な理由になっていないのかもチェックしたいと思います。

次にキリストを信じているがゆえに迫害を受けるということがあります。日本では、キリストを信じてバプテスマを受けようすると、家族に反対されることがよくあります。家族で誰かが違う信仰を持つと家庭の平和が乱れると思われているからです。たしかに一時的には平和が乱れるようなこともあると思います。しかし、それは一時的なことで、しっかり信仰に立ち続けるなら、必ず家族の理解を得ることができます。信仰を守ることが、最終的には家族を守ることになるのです。主イエスは「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、私の証人となります。」使徒 1:8 といわれ、弟子たちも「神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です」使徒 2:32 と言いました。私たちは賜物においては人それぞれ異なっています。しかし、すべてのクリスチャンは主の証人なのです。ペテロはペテロ第一 3:15、これは迫害を受けている中のことですが「心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」と迫害を受ける時こそキリストの証人であることが明確にされる時であると言っています。実は「証し人」と「殉教者」は同じことばです。それは殉教者こそ真の証し人という意味ではありません。そうではなくて生きてきた人生がキリストを証ししてきたので最後の死もキリストを証しすることになったということです。つまり初代のキリスト者は殉教を目指して生きていたわけではないのです。もちろん殉教を避けてきたわけでもありません。何よりも今、置かれている場で主イエスを証しするために自分に何が出来るのか？何を語ることが出来るのか？それが問われているのです。